

諏訪湖クラブニュース No. 18



もくじ

- 巻頭「平成 25 年度 へ向けて」
- ヒシが教えてくれたこと
- 第 24 回 諏訪湖チャリティウォーク報告
- 諏訪地域の持続可能なみらいに向けて
- 被災地サポート“め組 JAPAN”コーディネーター
- 橋之口みゆきさんのお話をお聞きして
- 寄稿 ミンダナオの風を・・・探しに!!! その 1

平成 25 年度へ向けて

諏訪湖クラブ会長 沖野 外輝夫

平成 25 年 4 月 27 日の総会にはお忙しい中を多くの会員にお集まり頂くことができ、感謝しております。お陰様で、平成 24 年度の締めくくりができ、平成 25 年度の船出を確認することができました。その後、5 月 3 日には第 24 回を迎えたチャリティー・ウォークも好天に恵まれて、100 人を越える参加者と共に湖畔を楽しく歩くことができました。昼食後に行われたフォーラムも長野県諏訪建設事務所のご厚意で釜口水門管理所の会議室で行うことができました。小学生から後期高齢者まで、楽しく、元気に過ごすことのできた五月晴れの日でした。企画された方々、ご協力頂いた方々、そして参加された方々に感謝の意を表させていただきます。有り難うございました。

ここ数年チャリティー・ウォークの参加者にはお子さん連れの方が多くなった気がしていましたが、その傾向は今年も同じで、定着したようです。子どもさん達が多くなるのは会としては嬉しいことです。この企画がこれからも長く続き、諏訪湖の生態系保全に関心を持つ人たちが多くなっていくことが期待されます。

一昨年から本格的に始動している自然エネルギー関係のプロジェクトも諏訪湖クラブの多くの会員が参加して信州ネット SUWA の運営委員会を中心に活発な活動を行っています。今年度はさらに具体的な取り組みへと発展していくことが期待されます。諏訪湖流域下水道豊田処理場の処理槽屋上への太陽光パネル設置についてのアイデアは、すでに設置計画が具体的に進行し、岡谷酸素グループが 1MW 規模で、今年末の発電開始を目指した設置準備を進めています。

地域の迷惑施設と目されていた下水処理場にはこのような未利用空間の活用以外にも多くの未利用エネルギー源があります。その一つが日夜流入、排出されている水量を利用しての小水力発電です。その具体的な利用計画を立案するための下水道エネルギー研究会も発足し、具体的な検討に入りました。この課題には多くの関係者と協力者が必要です。関心のある会員各位のご参加、ご提案をお願いします。

諏訪湖クラブの前身の主要な団体の一つである諏訪環境まちづくり懇談会の中心的なテーマは諏訪地域のまちづくりでした。諏訪湖クラブになってからもそのテーマは継続されていますが、この面での活動が活発に行われているとは言えません。これは会員の方々からも指摘されていることです。経済が全国的に低迷している現在こそ、地域でのまちづくりのあり方を基本に帰って再考する機会とも言えます。地域の自立を目指しての自然エネルギーの活用と共に、地域の自然・文化に根ざした「まちづくり」についても考えていきたいと思えます。会員各位のさらなるご協力をお願いする次第です。

最後に一言、前回のニュース巻頭でお知らせした私の体調について。診断結果は前立腺ガンでしたが、幸いに他への転移もなく、内分泌療法と放射線療法の併用で対処することになりました。前立腺ガンは初期であれば治癒可能だそうです。私も自覚症状は無く、体調に異常ありません。至って元気に過ごしていますのでご心配は無用です。



ヒシが教えてくれたこと

会員 武居 薫

諏訪湖ではそろそろヒシが湖面に葉を広げはじめます。ヒシは元々あった水草の一つですが、最近のように広い面積を占めることはこれまでありませんでした。水質が改善の傾向にあるとは言え、生き物を通してみればまだ多くの課題が残されています。

下諏訪町から諏訪市にかけての区域では平成 15 年頃からヒシが増えました。透明度が良くなってきたことから、このあたりではクロモやササバモなど、水中に葉を広げる水草（「沈水植物」と総称されます）が復活し始めていました。しかし、ヒシは水面に葉を広げて（「浮葉植物」といいます）日光を遮るので、沈水植物はまた見えなくなっています。沈水植物は光合成で水中に酸素を効率的に供給しますが、ヒシは水中には茎しかありません。沈水植物の葉には魚介類の餌となるプランクトンや小動物が住み着き、水中の葉は隠れ場所を提供します。

25 年度から刈取船によるヒシの除去が本格的に始まることになりました。これまで諏訪湖漁協が中心になって様々な団体が協力し、3 年前からは県の事業も加わって人手による抜き取りが行われてきました。私も何回か参加させていただきましたが、抜き取りをして感じたのは湖底が非常に硬くなっていったことでした。根まで取るのは至難の業で、硬いしっかりした茎が途中で切れてしまうことがほとんどでした。これまで、私はこの場所でエビモなどの沈水植物の調査を続けてきました。ヒシに比べればエビモは茎も細くて柔らかですが根まで簡単に取れました。諏訪湖に限らず、水質や底質が悪化し漁獲量が減少している全国の湖沼漁場では、湖底の生き物が少なくなって底質が硬くなる現象が見られます。漁業が順調に行われていれば漁船や漁具が漁場を“耕運する”ことになり、湖底環境は良い状態で維持されます。

当初は広いヒシ群落を前に人力でどれほどの効果があるのか気が遠くなるような作業でした。毎年大勢の協力で抜き取りが続けられた結果、昨年はヒシが減ったことが実感できるようになりました。そのうえ、初めての参加者でもヒシの根を容易に取ることができるようになり湖底の改善も見えてきました。

ヒシの抜き取りは船に乗っての作業が主で、漁業者など「湖のプロ」との連携が必要です。諏訪湖では多くのグループが浄化活動に関わっていますが、これからの「見えない汚濁」に対してはこれまでの主流の清掃活動などとは違った協働の体制づくりが必須です。「ヒシ対策は刈取船に任せておけばよい」と市民の諏訪湖への関心を削ぐことのないように、多くの市民が参加できるイベントとしてのヒシ対策の継続も重要です。生き物が示している課題の解決には「継続が力」なのです。



湖面を埋め尽くすヒシ (H23/7/24 諏訪湖博物館前)



作業中のヒシ刈取り船 (H24/9/5 下諏訪町高木沖)

★一般の方も参加可能なヒシ取りイベントが、昨年に引き続き、本年 7 月に行われます。
(詳細日程は調整中) AQUA SOCIAL FES 2013 <http://aquafes.jp/projects/69/>

第 24 回 諏訪湖チャリティウォーク報告

副会長 金子田美

朝から快晴！「24 回中でもこれだけのお天気は珍しい」と開会式挨拶での沖野会長の弁。昨年に引き続きどなたかの行いがとても良かったようです。諏訪湖畔にある諏訪市野外音楽堂に集合し、開会式終了後、午前 9 時ごろ、三々五々二方向〔岡谷市湊



方向（時計回り、約 8 キロ）と下諏訪方向（反時計回り、約 8.5 キロ）に分かれて歩き始める。

昨年同様チャリティウォークの参加者であることがお互いわかるように黄色のヒモを各自身につけてもらった。参加者同士交流しながら、沖野外輝夫先生、花里孝幸先生、宮原裕一先生の 3 講師を中心に、さらに信州大学の学生さん達（12 人）とともに諏訪湖の観察をしながら歩く。今年は低温気象のため、雪で真っ白になった北アルプスや富士山も見ることができた。今回は花里先生が初めて下諏訪方向へ、プランクトンを採取しながら。また宮原先生が湊方向へ、諏訪湖の希少種の水草発見を。1 週間前に撮影した資料も用意してくださり、子供たちも珍しい水草を発見することができたのではないのでしょうか。これからも諏訪湖に行って成長を見ていきましょう。諏訪建設事務所（維持管理課）で用意してくださった資料がまたよくできています。諏訪湖周辺のことをよく分かります。大事に活用させていただきます。それぞれのご準備あらためて感謝いたします。

12 時 00 分より、釜口水門管理棟会議室にてフォーラム開始。最初に、諏訪建設事務所長、河西明彦氏にご挨拶をいただく。フォーラムは 3 部構成。最初に信州大学山岳科学総合研究所で学ぶ沖繩県名護市出身の信州大学大学院工学系研究科修士課程 2 年の戸田龍太郎氏が「諏訪湖に棲むワカサギに寄生するミジンコ」と題して研究発表。

自らの研究についてとてもわかりやすく説明してくれた。寄生虫というあまり良い印象がないが、必ずしも悪い面ばかりでなく良い寄生虫もあることが分かり、寄生虫への一般的な印象を変えてくれた。「バイキンマン」の表現やイラストがたっぷり入ったスライドを見せたりと、小さな子供たちにも分かるように努力工夫が見られ、学生さんたちの発表方法も年々上達している感じです。小さな子供たちへの研究発表は本当に難しいですからね。

第 2 部は、「クイズ」。英語と日本語のバイリンガルで全員が挑戦。3 択問題の勝ち残り戦。毎回市民新聞社様からのご寄付のステキな賞品を目指して、

楽しくかつ少し博学になれる（？）時間です。生物同士の共生の重要性も自然に教えてもらっています。

最後は宮坂千恵美氏とその門下生（宮田紫央氏他）の「ピアノと歌のプレゼント」。司会は宮坂先生の娘さんで、会を盛り上げてくれました。最後にこのウォークのテーマソングとなっている諏訪湖浄化に夢を託して作られた『ブルー諏訪湖』をみんなで歌う。諏訪湖クラブ会員の有賀メアリーさんが英訳をしてくれた。プロジェクターで歌詞がみんなに分かるようにしたことも今年の工夫の一つで、参加者もより楽しく歌えたと思う。

閉会后、5 月の薫風の中、360 度のすばらしい



景色を眺めながら、湖上より今一度諏訪湖を観察。スワン丸の出航が 40 ほど遅れたが、無事帰諏訪。

「環境の学習」も、「楽しく国際交流」も、と欲張りなこの諏訪湖チャリティウォーク、上記内容で 24 回も無事開催できました。今年は特に親子で参加して下さったのが目立ったように思います。歩きながら子供たちが湖に手を入れたり、「本当に諏訪湖に親しみながら歩いた」という印象が強いようです。年々その傾向が高くなってきていることを本当に嬉しく思います。

寄付では小学生がポケットマネーから 500 円も、また例年大口寄付をしてくださる理事や参加者も。感謝です。しかし目に見える金品だけではなく、目に見えない形で協力をしてくださっている方もたくさんたくさんいらっしゃいます。昨年同様に今年も釜口水門管理棟会議室にてフォーラムが開催できたのもその一つです。諏訪建設事務所の関係者の皆様がたのご理解、また警備の八幡義雄氏（諏訪湖クラブ理事、元諏訪建設事務所長）と田代幸雄氏（諏訪湖クラブ会員、県職員）、ありがとうございます。お疲れさまでした。

皆さんそれぞれがそれぞれに「時間、労力、お金」を提供してくださっています。直接、間接に、本当に多くの方々が援助、協力をしてくださっています。**すべてに対し**、この場をお借りして、あらためて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

第 25 回の予定は例年どおり、平成 26 年（2014 年）5 月 3 日（憲法記念日）です。今からは是非ご予定に入れておいていただければ幸いです。

写真提供：八幡義雄氏

諏訪地域における持続可能なみらいに向けて ～長野県庁での 2 年間を振り返って～

会員 中島 恵理（環境省所属、富士見在住）

私は、10年以上も前から諏訪地域の東南端の町富士見町の農家の嫁として週末を過ごし、平日は国の環境行政に関わってきた。平成23年4月から2年間は、長野県庁の温暖化対策課長として自然エネルギーや地球温暖化対策に関わった。それは東日本大震災の直後のこと。福島原子力発電所の事故は、これまでの中央集権型、大規模なエネルギー供給体制の限界、そして、地域の資源を活用した地域分散型のエネルギー供給体制の必要性を示すものであった。

長野県は、温暖化対策課を新設し、自然エネルギー推進施策をトッププライオリティに掲げ、様々な施策を展開した。その中心が、市民、企業、行政による新しい公共による自然エネルギー推進プラットフォームである「自然エネルギー信州ネット」と地域レベルで草の根の自然エネルギーの事業化を促進する地域協議会の立ち上げであった。

私はかねてから、持続可能な未来に向けた協働・パートナーシップを環境省での仕事上の、又はライフワークの一つと位置付けていた。しかし、長野県という地域レベルでの実践は初めてであった。自然エネルギー信州ネットは平成23年2月から数回の準備会を経て立ち上げられたが、その間準備会に参加されていた NGO、企業などの方々と喧々諤々の議論が出発点になった。県庁がたたき台を作った信州自然エネルギー協議会構想は、その議論の中で新しい公共を実現する新しいプラットフォーム構想として生まれ変わった。また、地域協議会は、準備会メンバーと県庁職員が協働して勉強会を開催したことを契機に各地で次々と立ち上がり、現在では19にも上る地域協議会が民間主導で2年の内に立ち上がった。また、自然エネルギー信州ネットの活動の中核をなす専門部会が会員参加の主体的なワークショップの開催により8部会立ち上がった。そして、今では、この地域協議会や専門部会を出発点として地域を活性化する市民参加型の自然エネルギー事業が長野県各地で始まりつつある。

この2年間、長野県の市民や企業のみならずと試行錯誤をしながらも自然エネルギー信州ネットや地域協議会の立ち上げに関わることで、協働・パートナーシップの醍醐味を感じることができた。県庁だけでは決してこのような動きを作ることではできなかった。市民、企業、そして県職員が長野から始まる

持続可能な未来のために真剣に議論し、それぞれの立場で必要な行動をとり、連携・協働したゆえに、長野県内でのこのような自然エネルギーのネットワーク、プラットフォーム形成が実現したと思っている。

このような中でも、諏訪地域の活動は特に活発であった。自然エネルギー信州ネット SUWA が早い段階で結成され、活発な普及啓発活動が実践される中「みんなの自然エネルギー」という公益的な事業主体が立ち上げられた。諏訪湖クラブが提案されていた諏訪の下水処理場における太陽光発電事業。諏訪地域は長野県内でもトップクラスの太陽光発電所の適地。固定価格買い取り制度の導入に伴い、新しいビジネスモデルとして、長野県は「県有施設の屋根貸し」にチャレンジすることになった。県有施設を調査したところ、場所の広さや条件、日射量等の観点から諏訪湖の下水処理場がこの事業の第1候補地となった。この頃長野県内では、東京資本の大企業によるメガソーラー事業の立地計画が相次いでいた。自然エネルギーは地域の資源。長野県民の資金で作られた県有施設を活用するならば、地域の資源を地域の人たちが活用して、地域の持続可能な地域づくりのために使う。そのようなモデル事業をしたい。そこで、屋根を借りてメガソーラー事業を行う事業者の募集にあたっては、長野県内の企業を原則とし、地域資金の活用や収益の一部を地域に還元するなどの地域主導性、地域公共性を主要な条件とすることとした。結果として岡谷酸素が事業主体となり、メガソーラー事業が現在始まりつつある。また、信州ネット SUWA 代表の沖野先生が中心となって、下水処理場における小水力発電等の研究も始められている。かつては迷惑施設としてとらえられがちであった下水処理場が、諏訪6市町村民にとってかけがえのない環境保全のモデル展示場になろうとしている。

諏訪地域の自然は、東京で疲れ切った私に癒しとパワーを与えてくれた。そのような諏訪地域または長野県の環境保全のために何かしたいと思っていたときに長野県庁で働く機会を得た。実際に長野県と東京と両方で仕事をして、21世紀は、地域から実践し国を変えていく、地方の時代だと実感した。また、長野県のために、諏訪地域の持続可能な未来のために、自分にできることがあれば、全力で取り組みたいと思っている。

被災地サポート “め組 JAPAN” コーディネーター 橋之口みゆきさんのお話をお聞きして／美咲

4月10日、11日と、被災者への救援活動、被災地の復興活動を全面的にサポートされている「め組 JAPAN」
<http://maketheheaven.com/megumijapan/> コーディネーターの橋之口みゆきさんに信州にお越しいただき、お話を聞きました。石巻で暮らすみなさんの今を知ることができ、貴重なひとときでした。

みゆきさんと私の出逢いはまだ震災の起こる以前だった5年前のこと。鹿児島でのライブで大変お世話になりました。みゆきさんは鹿児島出身で、学生時代から、平和・環境問題に興味を持ち、発展途上国の支援ボランティアをされてきました。防災、ボランティアのプロです。世界中の子どもたちが平和で安心して暮らせる社会を願い、自分にできる活動を続けるために、地元で生きる智慧を学ぶ為のフリースクールを開校。スクールでは情報発信の場として子どもたちの学習、手作り教室、自然食や自然療法の教室、ボランティア活動などをされ、みゆきさん自身は全国各地で「いのち」をテーマにした講演活動を学校や、婦人会や、いろんなどこでされています。東日本大震災をきっかけに、め組 JAPAN のコーディネーターとして被災地に入り石巻に在住し、お仲間と共に支援活動をされています。

今年の2月はじめ、ふだん石巻か、お住まいの鹿児島にいるみゆきさんが「美咲ちゃん、いまどこにいるの？私、八ヶ岳！山梨！北杜市だよ！住んでるところから近いの？」と電話くださったことから、数年ぶりにお会いし、信州でお話会をしていただくという展開に。

め組 JAPAN のみなさんは、震災直後すぐに東北入りをされて2年間にわたり、現地のサポートをされています。本当にすごいことだなと思います。みゆきさんはそんな活動の一部を動画と写真をプロジェクターを使って映しながら紹介してくださいました。



震災直後は、津波の被害でドロドロになってしまった家の中をお掃除したり、津波によって折り重なってしまったクルマを撤去したり。もう無理だとあきらめたくなくなるような状態をたくさん見たけど「動けば変わる」を、実践していき、諦めずに続けていけば必ず変わっていくという経験を何度ももされてきたそうです。亡くなられたご主人のご位牌を探したり、遺体安置所のボランティアで、行方不明になってしまったご家族の方を写真からいっしょに探したり・・・見つからなかったそうです。心が折れそうになった時もあったといいます。でも、私がしっかりしなくちゃと芯を立てたのだとお話くださいました。町に緑が無くなってしまったから、ひまわりの種を植え育て、昨年の夏にはひまわりの花が町中に沢山咲いて、被災地のみなさんの笑顔がこぼれたそうです。子ども達を楽しめる機会をつくったり、思い切り遊べる場所をつくる活

動や石巻のお母さん方が自立をして仕事をつかって生活していけるように、会社づくりのお手伝いもされているそうです。本当に多岐にわたりサポートされている様子と、前向きに進んでいこうとする石巻のみなさんの様子が伝わって来て、一言で言い表せない気持ちが込み上げてきました。

「いまの東北はお金や物資の支援は大丈夫。それよりも心の支援を。現地の方と交流してください。仲良くなって下さい。あなたのことを想ってるよと心を寄せてほしい。」そうメッセージをくださいました。

想われてるぬくもりを感じることで、人間は元気になれるものなのですね。言葉で、文字で、幸せを、やさしさを分かち合うことができる。東北のみなさんにつながり、心を通わせることの大切さを感じさせていただきました。



寄稿 ミンダナオの風を・・・探しに!!! その1

専務理事 長崎 政直

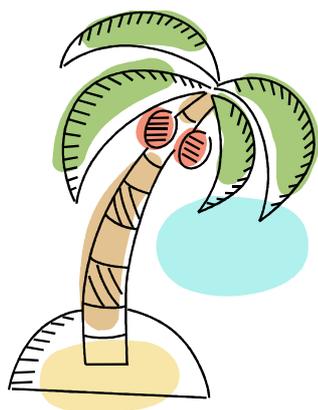


プロローグ：経過・訪問目的

ミンダナオ子供図書館財団へ1月に行ってきました。同行者は、溝口幸二先生と高校の同級生の下諏訪中学校の元校長、小池博君でした。

ミンダナオへ行くという話をすると内戦中らしいが大丈夫ですか？殺されるかもしれませんよ!! などと脅されもしました。お金持ちと思われる日本人だから殺されることはないが誘拐はありそうだからその時の身代金は頼むなどと言いながら、こいつはちょっと冒険だなーという気分でした。

2012年11月、溝口先生から下諏訪図書館でフィリピン在住の松居友さんの講演会があるから聞きに来てくださいと誘われ、現在、フィリピン・セブ島で「セブ島の子供たちに音楽学習を！日本の子供たちに国際交流を！！」というロータリークラブの国際奉仕事業に関わる身としては、何かの参考になればとの思いで参加しました。



松居さんのお話は、ミンダナオ島でやっている山村僻地に住む子供達や海岸に不法に住む貧しい家庭の子供たち、内戦により孤児になってしまった子供達の生活支援や奨学支援の話でした。そんな活動をして頑張っている松居さんの生き様が興味深く、講演後、溝口先生に「一度、行って、見てみたいものですね!!」とお話したところ、即座に同意してくれました。

後日、小池博君に、鍵盤ハーモニカの収集を手伝ってもらった経過もあって、「セブ島事業に参加しないか、ミンダナオへも行くよ」と誘ったところ、彼も「俺も行きたい」ということで、ミンダナオ行となりました。

ミンダナオ訪問は、セブ島の奉仕事業のおまけ、ちょっとした好奇心・観光気分から企画されたものです。

ミンダナオ子供図書館財団

MCLF は以下に掲げた支援を行っている財団です。

私たちの支援は、
心の活動を中心にしています。
私たちの支援は、
山岳民族や難民キャンプの貧しい人々に
ただ物資を送るのではなく、
フィリピン人の若いスカラシップ(奨学)学生たちや
スタッフたちが
地域を訪れ、読み聞かせをしたり、
ボックス文庫を作ったり、
きめ細かな心のふれ合いのなかで、
支援する側の若者たちと
貧しい地域の子供もたちが、
時間をかけて
ともに育っていく場をつくる支援です。

医療プロジェクトも
読み聞かせに訪れた地域の病気の子供もたちを、
完治するまで見とどけ面倒を見たいうで、
その後の再訪やケアもするなかで、
支援するフィリピンの若者や日本の人々、
そして貧しい村人たちが
心から喜びを分かちあう場をつくる援助です。
あなたも参加してみませんか。

MCLF の具体的活動内容

- ① 120人の子供たちをキダパワンにある寄宿舎に收容し、生活の面倒を見ると共に、小学校、高校へと通学させています。
- ② ここに收容できない山奥の子供たちには、山の寄宿舎をつくり、同様の通学支援をしています。
- ③ 加えて貧困家庭からの小学校、高校、大学への通学支援として学費援助、生活支援として古着・古靴の支給や医療支援も行っています。現在の支援者数は620名とのことです。
- ④ さらに、山村や僻地に出かけ、古着の衣服や古靴を配布すると共に、子供たちの情操教育・文字の習得などに効果があるとされる読み聞かせもやっています。
- ⑤ また2年ほど前、フィリピンの学校制度が変わって、就学前教育を受けていないと小学校へ入学できないことになりました。市から遠く離れた山村や僻地には小学校はありませんし、Day Care Center (保育所) もありません。当然、そこに住む子供たちは小学校に行くこ

とができませんから、MCLF では、そうした山村・僻地に Day Care Center をつくり、維持していくことは始めています。現在 30ヶ所の Day Care Center が建築されたり、計画 中だということでした。

⑥ ミンダナオは未だ内戦中です。その内戦から避難した人々や、自然災害（水害が多い）により被災した人々に援助の手を差し伸べることも MCLF の活動です。

- * ミンダナオ子供図書館財団では、上記寄宿舍からの①②通学支援のほかに③の家庭からの通学支援を含め 620 名の子供たちの生活および通学支援を行っています。
- * 財団スタッフの給料は、全て均一に月額 1 万ペソが支払われています。
- * ミンダナオ子供図書館の年間収支決算規模は約 2,000 万円で 99%個人寄付によるそうです。

手を差し伸べなければならぬ子供が増える背景：内戦と貧困

ミンダナオ島には、古くからのアミニズム（自然神崇拜）、イスラム教、キリスト教を信じる人々が混在し、宗教がらみの戦闘も繰り返されてきました。イスラム教を信奉する人々は、1970 年代から独立を目指すようになり、政府と交渉を始めました。政府が示した和平案はムスリム・イスラム自治区案（ARMM）で、交渉が行われるたびに、条件に乗れないとする過激派が分派を繰り返し、政府軍、モロ民族解放戦線（MNLF）そこから派生したモロ・イスラム解放戦線（MILF）、さらにそこから派生したバンサロモ・イスラム自由運動（BIFF）との戦闘、加えて近年弱体化したと言われる共産系反政府組織人民軍（NPA）との戦闘もあり複雑な内戦状態にあります。直近の戦闘は 1912 年 3 月～12 月にかけて政府軍と NPA との間で行われています。

この戦闘の背景には、イスラム系住民の居住地域にある地下資源（石油・天然ガス）への中華系富裕層、またその背後にはアメリカの大資本の思惑や軍需産業の影もチラついていいるとのこと。

ミンダナオには多くのバナナ・プランテーションがあります。そこは、かつてジャングルだったのですが、ラワン材の伐採によりはげ山となり、その跡へ富裕層がプランテーションを開発、もともとの地主から土地を買い上げ、そこに住んでいた人々は生活の場を失い、僻地へ移住していくという構図もあるようです。

こうした戦闘や資本の収奪がそこに住む人々の生活基盤を破壊し、住む人を僻地へと追いやり、貧困が進むという構図のようです。

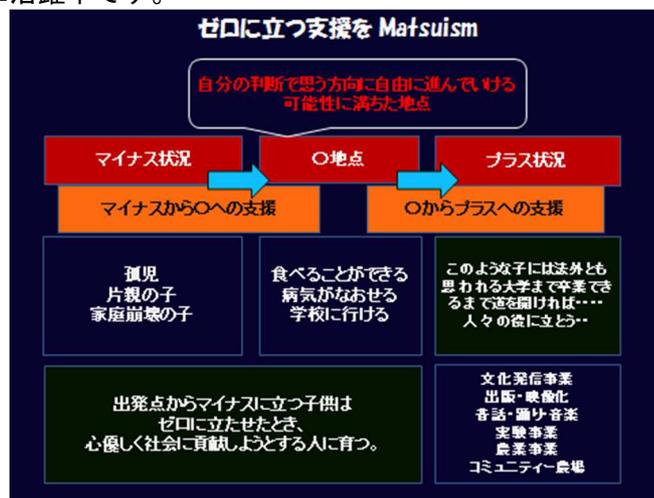
松居 友さんのプロフィール

MCLF を首唱している松居友さんは 1953 年生まれ、現在 59 歳です。東京・杉並に生まれ、小学校時代、高学年の担任はあの無着成恭先生で生涯の恩師と

して深く影響を受けたそうです。松居さんの自由な発想や子供達に接する態度は、なるほどということかと思わせます。

ザルツブルグ大学を卒業後、そこで知り合ったアメリカ人スーザンさんと帰国後結婚、徳間書店へ就職、10 年勤めた後、自然のある生活を求め、北海道へ移住、北海道生活 10 年、中年の危機を体験し、気持ちを切り替えにフィリピンの孤児施設に行く。滞在中に電話で妻から離婚を言い渡され、絶望の底に落ちるが、イエスへの信仰により救われる。

孤独の中でフィリピンに再度訪問、貧しい孤児たちに救われる。貧しい孤児たちや若者たちに生涯をささげることを決意、キダパワンに【ミンダナオ子供図書館財団】を設立し、その後、生涯一緒に貧しい子供達の医療と図書館の仕事をしていきたいという思いからエープリル・リンさんと再婚、現在はスタッフと共に【ミンダナオ子供図書館財団】活動に活躍中です。



Davao 到着

ダヴァオ (Davao) はエコ・シティーを目指して、きれいな、緑の多い街だとセブのトニーさんが言っていました。フィリピンの他の町と違って、清掃も行き届いたきれいな街です。今の市長がごみを捨てることを禁じる市の条例を制定したのだそうです。

2 年前の盲学校訪問時に、空港の建物を出てタバコを吸っていたらピストルを持ったガードマンが走ってきて「ダメ!ダメ!!」と追い払われたのを思い出しました。

松居さんとの折衝は、溝口先生に任せておいたのですが、しっかりした打ち合わせもなかったようで、出迎えの MCLF に来て活動中のボランティア大野さん姉妹を見つけるための情報も名前だけで、ほとんどありませんでした。

セブ・マクタン空港から飛行機で約 1 時間のダバオ空港に降り立って、しばらくウロウロしましたが、日本人の影は少なく、ほどなく相互に見ることができました。

出迎えはフィリピン人の男性スタッフ 2 名と 4 人で、4 輪駆動のピックアップに持参した鍵盤ハ

一モニカとわずかな荷物を積み込み、さて、7人どう乗るのだろうと思っていると、そこはフィリピンスタイル、荷台に2人が乗り込み、5人が車内で、自己紹介もそこそこに出発です。

朝食 Davao Calinan 地区

空港から40分ほど走って、カリナン(Calinan)の路傍の食堂で朝食をいただくことになりました。かなり大きな町で朝から賑わっていました。食堂では店の前で朝から豚肉を焼き、その匂いが食欲をそそります。6品くらいを注文し、シェアして食べました。なかなかの地元の味です。食後のマンゴーは今回の訪問の中で最高の甘みと酸のバランスでした。さすがに果実や花などを主要産業とするミンダナオならではの・・・ということでしょう。

代金は7人分640ペソ、約1500円弱、とてもお値打ちな朝食でした。

目的地 アラカン Arakan へ

ピックアップの荷台には大きなタイヤが2本積まれていました。スタッフの一人がそこに座っていたので、椅子代わりに置いてあるものと思い、すわり心地はどうだと聞くと座って走ってみると良いと誘います。それも良いかなと少し思いましたが、高齢者には耐えられそうもなくお断りしました。これは結果、正しい判断でした。その後走った山岳道路は、とんでもなく荒れていて、多分、荷台から弾き飛ばされていたでしょう。

アポ山の北側の山を越え、谷を越え、橋のない川を渡り、内臓が飛び出しそうな悪路でした。

ところどころに集落があり、バナナ・プランテーションで働く男たちが、集荷箱を作ったり、バナナの集荷をしています。

行き交う車は少ないのですが、たまに遭う大型トラックには荷物がいっぱい、その上に離れた集落へ出かける人たちが何人か乗っています。私たちのピックアップ・アップの荷台にも何人か乗り込んできました。木橋を引く水牛を二度ほど見かけました。水牛、馬がここの主力の交通手段、運搬手段のようです。

松居さんに逢えました



アポ山の北側のアラカン(Arakan)の山の売店兼食堂でとうとう松居さんに逢えました。

私達は東側Davaoから登り、松井さんは西側キダパワン(Kidapawan)から登ってきていました。

松居さんはここからさらに山の中のブンドク地区に行き、デイ・ケア・センターDay Care Centerをつくる最終の打合せをするのだそうです。

阿部ひろ江さんという京都から来たシンガー・ソング・ライターとそのお友達西山真理さんも一緒にしました。

店の片隅に水着姿の女性のポスターが、薄汚れたまま3枚も貼ってありました。良く見ると2010年のカレンダーでした。きっと店の主人のお気に入りなのでしょう。(つづく)

理事会報告

- 第57回 日時：平成25年4月21日(日)10:00~11:45
 場所：スマートレイク事務所
 出席者：沖野、金子(田)、宮坂(平)、長崎(功)、八幡、市川、五味(光)
 内容：
 1. 平成25年度総会について
 2. その他
 1) 下水道研究会について
 2) ハイジプロジェクト(味噌工場廃液処理場跡地の利用計画)について

- 第58回 日時：平成25年5月19日(日)10:00~12:00
 場所：スマートレイク事務所
 出席者：沖野、長崎(政)、長崎(功)、宮坂(平)、宮原、八幡、市川
 内容：
 1. 総会報告
 2. チャリティウォーク報告
 3. 第2回下水道エネルギー研究会開催について
 4. その他

